

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督：フレデリック・ワイズマン
出演者：エミリー・コゼット / オー
レリ・デュボン / ドロテ・ジ
ルベール / マリ＝アニエ
ス・ジロ / アニエス・ルテス
テュ / デルフィーン・ムッサ
ン / クレールマリ・オスタ /
レティシア・ブジョル / カデ
ル・ベラルビ / ジェレミー・
ペラン / ガール / マチュー・ガ
ニオ / マニユエル・ルグリ /
ニコラ・ルリッシュ

パリ・オペラ座のすべて

2009年・フランス映画
配給 / ショウゲート
160分

2009 (平成 21) 年 11 月 3 日鑑賞

テアトル梅田

👁️👁️ みどころ

タイトルどおり、フレデリック・ワイズマン監督が84日間の密着取材によつて、約350年の歴史を持つパリ・オペラ座のすべてをスクリーン上に。厳しい練習風景と本番での完成された美しさは圧巻！

甘やかされた若者たちが増えている昨今、やっぱり競争が不可欠だと痛感したのは私だけ？満席の観客たちも、充実した160分を過ごせたことに大満足のはずだ。

パリ・オペラ座はいつ？誰が？

日本では歌舞伎や能、文楽など古典芸能がたくさんあるし、中国でも京劇や崑劇など古典芸能は多い。しかし、1661年の王立舞踏アカデミーの設立にさかのぼるといふ起源をもつパリ・オペラ座は、文明国フランスなればこそその存在だ。私たちにはミュージカルや映画の『オペラ座の怪人』(04年)でお馴染みだが、あの晴れの舞台や怪人が住む地下の大水路などを備えたパリ・オペラ座は、何と今から約350年前の太陽王ルイ14世の時代に設立されたものなのだ。そしてそれは、オペラ座というハードの建設だけでなく、ダンスの理論化や体系化、そして1713年の付属のバレエ学校の設立など総合的・体系的なバレエ芸術の確立を目指したものだからすごい。

そんな最古の伝統をもつパリ・オペラ座だが、さらにすごいのは伝統を守ると同時に常に最先端の技術を求めていること。私には詳しいことはわからないが、バレエ特有のチュチュと呼ばれる薄物の衣装やトウシューズを履いてつま先立ちで踊るバレリーナが舞台上に登場したのは19世紀初めだといふからビックリ。『花の生涯～梅蘭芳～(梅蘭芳 / For

ever Enthralled)』(08年)でも、映画の前半伝統を守ろうとする老師匠と改革を目指す若き日の梅蘭芳の対立が描かれていたが、伝統と改革は両方とも大事。本作はそんなことを理屈から教えるのではなく、スクリーンでみせる個々の「エトワール」たちの圧倒的な存在感だけでそれを伝えてくれる。まずは、そんなパリ・オペラ座という特別な存在についてしっかり認識を。

エトワールとは？その競争原理は宝塚と同じ？

中国も韓国も厳しい競争社会・学歴社会だが、なぜか日本だけは近年競争は悪いことだという価値観が定着してきた。もちろん、格差の定着や格差の拡大は望ましいことではないが、そうだからといって競争を否定するのは全くナンセンス。活力ある社会や有為な人材を生み出すためには、競争は不可欠だ。

本作に登場するエトワールとは、パリ・オペラ座で厳しい競争を勝ち抜いて選ばれたダンサーの最高位。エトワールとは星の意味だが、昇格試験によってカドリーユ、コリフェ、スジェ、ブルミエ・ダンスールと上がってくる4つの階級とは別格の最高位で、オペラ座総裁によって任命される。パリ・オペラ座のダンサーの定員は150名だが、エトワールは概ね16~18名で、本作撮影中のエトワールは18名(男性10名、女性8名)。すばらしい才能を持ったうえ、日夜たゆまぬ努力を続けて競争を勝ち抜き、「際立った個性や魅力のある天性の才能を持つダンサー」と認められた者だけが、エトワールの称号を与えられるわけだ。

ちなみに、1913年の設立以来100年近い歴史を誇る宝塚は、現在5つの組と専科に分けられているが、各組の組長と副組長は1人ずつだから計10名。また「スターシステム」を採用している宝塚では、各組に主演男役(トップスター)と主演娘役(トップ娘役)がいるが、これも計10名。宝塚には約450名のタカラジェンヌがいるからトップになるのは至難の業で、それはエトワールになるのと同じようなもの？

これぞ密着取材！密着撮影！

私の初の中国語による旅行記・映画評論本『取景中国』が09年8月18日上海展覽中心で開催されたブックフェア(上海書展)に出展されたため、私は09年8月17日~20日毛丹青さんと一緒に上海を旅行したが、この際中国中央テレビ(CCTV)が毛さんに密着取材をした。これは一人の人間の生きざまに焦点をあてた毎日放送の『情熱大陸』のような番組『華人中国』の取材のためだったが、上海での3日間にわたるCCTVの取材に私も同席し、これぞ密着取材という体験をした。

毛さんへの密着取材は1週間に及ぶものだったが、フレデリック・ワイズマン監督がパリ・オペラ座のすべてをドキュメンタリーとしてまとめるためにパリ・オペラ座の全面協力を得て密着取材したのは、07年から08年にかけての84日間というからすごい。本

作のメインは団員たちの厳しい日常の練習風景だが、同時に衣装や舞台設営など裏方の仕事やパリ・オペラ座を常に世界最高のバレエ団として率いなければならないブリジット・ルフェーヴル芸術監督の姿なども生々しく映し出されていく。そして圧巻は、エトワールたちが演ずる本番の舞台。数分間に及ぶその踊りに観客は息を呑み、思わず呼吸するのも忘れるほど集中し凝視するはずだ。まさに、これぞ密着取材！密着撮影！



C Idéale Audience - Zipporah Films - France 2009 Tous droits reserves -
All rights reserved

久しぶりに満席を体験

小さい試写室での満席はよくあるが、映画館ではガラガラ状態が多い。ホクテンザは別格(?)として、シネコン形式の映画館でも梅田ピカデリーはガラガラの時が多く、満席を体験したのは『DEATH NOTE(デスノート)前編』(06年)、『DEATH NOTE(デスノート) the Last name』(06年)の時くらい。また、テアトル梅田でも最近満席を体験したのは『闇の子供たち』(08年)や『今宵、フィッツジェラルド劇場で』(06年)など数本だったが、本作は久しぶりの満席。

最近白内障が進み、視力が落ちているため、試写室ではいつも一番前の席で、映画館でも前から3~4番目の席で観ているが、今回は少し遅れて入ったこともあり前から2番目の列のほぼ中央の席。しかし、最前列もすぐに満席になったから、本作の人気はすごい。上映時間は160分と長いが年配者が多いこともあり、本作に限っては途中ボソボソとお菓子を食べる不心得者はおらず、ほとんどの観客がスクリーンに集中していた。やはり、いい映画をつくれれば観客は集まるし、集中して鑑賞し満足して帰ってもらえるわけだ。そんな当たり前のことを、本作であらためて痛感！

2009(平成21)年11月5日記